

企業名： 石光商事

レポート名： 統合報告書2021

1. この会社が目指す姿が理解できるか

統合報告書における各所に会社の将来の展望が記されており、特に自身の会社における脅威や弱みを企画・研究開発、調達、生産・品質管理、出荷物流、販売・マーケティング、人事・労働管理・全般管理と細かく分類し、各分野ごとに提示し、その一つ一つの問題点に対し個々の対応策や付加価値を提示していることについては、わかりやすく感じた。しかしその内容は若干抽象的すぎるようにも感じた。また、事業内容に関しては、自社のコーヒー、食品、海外事業という3つの柱のそれぞれについて、その特徴と前年からみた成長が記されるとともに、より細かくどのように市場を開拓していくかが述べられており、この部分についてはとても分かりやすいと感じた。

2. この会社の競争優位性が理解できるか

競争優位性については先ほど述べた3つの、コーヒー・飲料部門、食品部門、海外事業部門についてそれぞれ強みが詳しく述べられていた。部門内でさらに細かく分類し、その一つ一つに対して前年からの成長率が示され、成長がみられた分野については、その理由が細かに示されている点で競争優位性は理解がしやすかった。また、成長率がマイナスをとってしまったものに関しても、コロナウイルスが具体的にどのように作用し、その結果になったのが述べられており、競争優位性を理解する上では役立った。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

各部門における競争優位性に関しては、基本的には、各部門の資料の終わりに、その部門において何が強みとなっているのか、現在どのようなことを行っているのか、将来のための指針がまとめて記されており、そこから持続性を推測することとなるが、その競争優位性の持続性があるかを判断する直接的な証拠となるには言葉だけでは物足りないように感じた。一方で、副社長による財務方針の発表では特に海外事業について判断するには、これまでどのようなことがなされてきて、それがどのように会社の発展に効果をもたらしてきたのが具体的に示されていたため、こちらに関してはその持続性があるということが

分かりやすかった。また、全体としても、社長メッセージの中に「コロナ化の厳しい経営環境の中、過去最高益を更新」という見出しと記事があり、成長、持続を読み取るための根拠となると感じた。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

石光商事の統合報告書には社長メッセージの一部として、新規事業の創出と結びつけて人材育成が取り上げられており、特にSDGsなど、社会課題の解決の視点からこれらが行われている。ここでは、SDGsへの取り組みとして、勉強会を開く、大学院に対して派遣するなどの制度を実現し、実際にその過程で事新しい商品や事業が作られたということで、複数の事例が取り上げられていた。また、近年では社会課題に取り組む風土が出来上がり、新入社員からも積極的な事業化提案もなされると述べられている。また、副社長のメッセージ内においては、海外事業を推進するためにグローバルスタンダードを意識した専門的な教育研修制度を構築していると述べられている。これらのことから考えると、実際に共同研究などによる新規事業の創設の実績もあるため人的資本の価値を向上させるという観点からは問題ないといえるが、新入社員による事業化については実績が具体的に示されていないなかったり、それをサポートする方法が示されていないなかったりと懸念点もあるように感じた。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

社会的課題と目標についてはよく書かれているが、実際にどのような方法を使ってこれを実現していくのかという部分については、理念など若干抽象的なものが多すぎたため、もう少し具体的な施策を提示すべきである。また、成長率も去年との比較のみしか存在せず、今後を予想するためには不十分であるといえる。コロナ前を含む数年間を推移を提示することでより信頼性が高まると考えられる。